全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.27 （Jul. 2016）

初夏の上山高原。梅雨空の合間を縫うように、視界に緑の草原が広がった。
秋には第 11 回草原サミット・シンポジウムの会場となる（兵庫県美方郡新温泉町）。

第 11 回全国草原サミット・シンポジウムについて

2016 年 10 月 15～17 日に開催される「第 11 回全国草原サミット・シンポジウム in 上山高原」が近づきました。現在までに決まっている内容についてお知らせします。

【期　日】2016 年 10 月 15 日～17 日
【場　所】兵庫県美方郡新温泉町
　　町民センター・上山高原など
【テーマ】
人と草原　イヌワシが舞い　但馬牛があそぶ
【開催地の特徴】
新温泉町は、兵庫県の北西部に位置し、北は日本海、西は鳥取県、南・東は香美町に接しています。内陸部は 1,000 メートル級の山々に囲まれ、山陰海岸国立公園をはじめ自然公園指定区域が 46%を占める自然豊かな山間地域です。平成 22 年には山陰海岸ジオパークとして世界認定されるなど、貴重な地質遺産も有しています。

上山高原は、鳥取県にまたがる「氷ノ山・那岐山国定公園」内にあり、標高 800～900 メートルの間にススキの草原やブナ林などが広がっています。冬期には 3 メートルを超える積雪があり大変厳しい自然環境ながら、春の山焼き風景や秋のススキ一面の草原は地域の風物詩でもあります。

【予定されているプログラム】

○10 月 15 日(土)　現地見学会
上山高原の歴史に関する話を聞き、草原を散策します。

○10 月 16 日(日)　全国草原シンポジウム
①基調講演
「草原の再生と生物多様性」（武田義明氏）
②実践報告
「上山高原と人の歩み そして再生へ」
「ススキ再資源化のとりくみ～芸北茅プロジェクト」
「野草堆肥における善玉菌のすばらしい世界」
③分科会（4 つの分科会を予定）
(1) ジオパーク活動と草原
(2) 地域の草原を維持する仕組みづくり
(3) 草資源の農業・畜産への利用方法について
(4) 茅葺き文化の継承のための茅場の保全・再生
④全体討論会
⑤交流会

○10 月 17 日(月)　全国草原サミット
草原を有する全国の自治体の首長によるサミットを開催。一般の方にも公開を予定しています。

●問い合わせ先
第 11 回全国草原サミット・シンポジウム実行委員会　事務局
〒669-6702　兵庫県美方郡新温泉町浜坂 2673-1　新温泉町農林水産課
TEL 0796－82－5626　FAX 0796－82－3054　e-mail：sogenss_ask@stork.u-hyogo.ac.jp
ホームページ：http://www.stork.u.hyogo.ac.jp/sogenss/
※近日中に詳細なプログラムや申し込みの案内がある予定です。

全国草原再生ネットワーク 10 周年記念シンポジウム・総会の報告

シンポジウム第 1 部「～草原保全のいろいろ～各地の草原の魅力を語ろう」を聞いて。

（増井大樹：滋賀県在住）

2016 年 6 月 25 日に朝日新聞東京本社 2 階「読者ホール」にて草原再生ネットワーク 10 周年シンポジウムが開かれました。第 1 部として、全国各地の草原保全に関わる皆さんからの事例紹介が行われました。その様子を少しご紹介したいと思います。

①阿蘇グリーンストック（清野耕平氏）「阿蘇の草原保全・再生の取り組みについて」

阿蘇グリーンストック若手の清野氏がグリーンストック設立から現在までの活動の歩みについて紹介を行いました。毎年絶えず新たな事業が実施され、阿蘇の草原保全に欠かせない役割を果たすようになるまでの様子がシンプルに紹介されました。他の事例に比べ、“安全管理”という点に重点が置かれ、ボランティアと一緒になって考えた野焼きボランティアの心得やヒヤリハット事例集等の取り組みが特徴的でした。

②森林塾青水（西村大志氏）「上ノ原入会の森の魅力と保全 ～都市と地域と草原とのほどよい関係をめざして～」

森林塾青水の最若手の西村氏が森林塾青水の活動紹介を行いました。森林塾青水は所と県に住む会員が約 150 ㎞も離れた遠方の草原の保全活動を行う全国的に見ても珍しい保全団体です。その活動理念である「飲水思源」について紹介がありました。「水を飲む者は、その源に思いを致せ」ということを実践するために、利根川最上流部であるみなかみ町藤原地区の草原保全活動を行っていることや、流域コモンズをモットーに人や資金、茅資源が都市と地域で行きかうモデルづくりを実践していることが報告されました。課題としては、地元との関係づくりや会員の固定化などがあげられましたが、「楽しみながら活動を継続し、都市と地域と草原のほどよい関係を地道に作っていく」という言葉に集約されるように、地道に活動を継続することの大切さが伝わってきた発表でした。

③全国カヤネズミ・ネットワーク（畠佐代子氏）「カヤネズミの住むカヤ原復活プロジェクト」

全国カヤネズミ・ネットワークの畠佐代子氏より、淀川流域（京都市）で行われている「カヤ原復活プロジェクト」について紹介がありました。淀川流域はオギが生育し、カヤネズミの生息地として畠氏が以前より調査研究を行っていました。話の中では主に数年前に国土交通省の河川改修工事が実施された際のカヤネズミの保全措置について紹介がありました。開発行為に対して調査研究の成果を活用しながら的確に対応した結果、カヤネズミの生育地を守ることができたとのことで、工事に反対するのではなく、国土交通省と話し合いを行い、カヤネズミの移動距離をもとに段階的に工事範囲を設定したり、オギが生育していた場所の表土を保全し、工事後に再導入する等の措置を講じたりした結果、河川改修後にもカヤネズミが減ることはなかったそうです。また、オギの生育していた場所の表土を植生回復に用いた結果、以前はびこっていたセイタカアワダチソウの群落が減少するなど、工事後の方が環境が良くなったとのコメントもありました。

④安比高原ふるさと倶楽部（渋谷晃太郎氏）「安比高原シバ草原　草原と馬事文化の維持を目指して」

岩手県立大学教授、渋谷氏より安比高原の草原保全活動について紹介がありました。安比高原は岩手県の北部に広がる草原で、かつては放牧地として利用が行われていました。特に南部馬の産地として有名だったそうです。しかし、ほかの草原と同様に昭和 40 年代より徐々に利用が放棄された結果、だんだんと樹木が侵入してきたそうです。数年前よりボランティア団体「安比高原ふるさと倶楽部」を結成し、草原保全の活動を始めたそうです。現在ではボランティアによる侵入樹木の除伐や馬の放牧と馬の放牧用の牧柵を整備するなどの活動を行っているとのことでした。特に馬の放牧はただ単に草原保全のためというわけではなく、岩手県に古くから伝わる馬の文化を残すためにも重要であるとの認識のもとに活動をおこなっているそうです。

⑤シャボン玉石けん株式会社（波多江修一氏）「環境にやさしい石けん系消火剤を用いた森林および草原保全の取り組み」

シャボン玉石けん株式会社研究開発部、波多江氏より、同社が開発した石けん系消火剤を用いた、火入れ時の効率的な消火への取り組みについて紹介がありました。シャボン玉石けん株式会社では、無添加せっけんの利点を生かして環境に無害な消火剤の開発を進めてきたそうです。すでに森林火災向けの商品は開発しており、現在は、火入れに特化した商品を開発しているとのことでした。ジェットシューターの中の水に少量石けんを混入したもので、効率的に火を消すことができるかを三瓶山の火入れや雲月山の火入れで現地の人に体験してもらった結果、おおむね効果があるとの回答が得られたことが報告されました。

シンポジウム第 2 部「パネルディスカッション～草原保全のこれからの 10 年～」に参加して

（岩田光太：東京都在住）

休憩後、井上雅仁氏（島根県三瓶自然館）がコーディネーターとなり、3 人のパネリスト（岡野隆宏氏：環境省自然環境局自然環境計画課、高川晋一氏：公益財団法人日本自然保護協会、白川勝信氏：北広島町立芸北高原の自然館）と草原保全のこれからの 10 年というテーマでパネルディスカッションが実施されました。

冒頭、井上氏から、景観・生物多様性・地域文化伝承といった形で現れる「草原の価値」を保全する「今」の取り組みとして第 1 部で 5 団体から活動報告があり、今回のパネルディスカッションのテーマは「これからの 10 年」というつながりが示されてディスカッションが進んでいきました。

まず高川氏から、私たちの身近にある「原っぱ（小さな草原）」が失われていることに気付いていないという状況が「危機」であるという問題提起がなされました。また草原の重要性が分かってくるにつれ、それまで「自然保護」として森の木々を守ってきた人々に、逆に木を切ることを勧めざるを得ないというジレンマについても問題提起がなされました。

白川氏からはボランティア協力による火入れという仕組み自体が最終形ではないという観点で、「せどやま事業」について紹介がありました。これは、里山からの薪材産出に地域通貨（せどやま通貨）を組

み合わせることで、対価のある生産活動を創造し、かつ産出された価値が地域で消費されるデザインとなっています。この取り組みは、放置されている里山に実施される行政支援のみならずボランティア活動も「社会資本の喪失」ととらえ、里山に新たな利用目的を見出すことを直接的な課題とするものです。

このような取組事例を受け、岡野氏から環境省の取り組みとして、草原を「新たなコモンズ（共有地）」ととらえ、様々な関係者が集う仕組みとしての「阿蘇草原再生全体構想」が共有されました。これは草原関連の調査・協議の場・資金確保という関係性が行政・財界・学会等を含む横断的なデザインとなっています。この取り組みも、草原の新たな目的を多

方面に生み出すことを直接的な課題とするものです。

ディスカッションを通じて私はこれからの 10 年が「さらなる効率化」になると感じました。再生ネットワークの活動も諸先輩方のご尽力で 10 周年を迎え、進展した分野がある一方で、草原面積や希少種の減少に歯止めがかかり切らない実情もあると思います。そうした状況で、限りある資源の効率活用・ノウハウの集約を図ること、一般企業でいえば「選択と集中」が求められているのだと感じました。次に打つ重要な一手は、苦境にあるからこそ各所で危機意識が連帯感を生み、創造的な一手が打ち出されていくものと信じております。

理事会・総会が開催されました （事務局）

6 月 26 日に、東京駅八重洲口オフィス東京で第 10 回総会を開催しました。前日の 25 日には全国草原再生ネットワーク 10 周年記念事業「草原シンポジウム 2016 in 東京」が開催されたこともあって、多くの会員の参加があり会場が狭く感じられるほどでした。

今回の総会は理事会と総会の同時開催とし、2015 年事業報告と決算報告を踏まえ、2016 年度事業計画と予算審議に多くの時間を割きました。昨年は第 10 回全国草原サミットの「阿蘇宣言」で提起された自治体間ネットワークの設立、草原 100 選、草原の経済的価値評価等のフォローアップを精力的に行ってきた経緯があり、会議に先立ち(公財)阿蘇グリーンストック副理事長山内氏からそれらの進捗状況について報告を受けました。地震やその後の対応でネットワークつくりどころではなかったろうとの憶測をよそに、予定されていたイベントが中止になり、阿蘇市町村会の首長さんたちは草原再生・自治体間ネットワーク構築に力を入れ、動き出していると聞いて一同驚きました。また、草原を災害復興に結び付けようとの県知事の考えを伺い、さすがとしか言いようがありませんでした。

これらの報告を受け、「自治体間ネットワーク設立は現在展開している当ネットワークの事業一つ一つの在り方だけでなく、草原再生活動そのものに大きな転機をもたらすものになる」との意見が会場から多く出されました。そして、この実現のために私たちがするべきことを確認しました。まず、今年 10 月の兵庫県新温泉町での第 11 回全国草原サミットで自治体間ネットワークの設立を呼び掛け、同 11 月に東京での全国町村会の会合の折に発足総会を開催することに向けて支援をすることです。つまり発起人になる自治体を選ぶこと、そして呼びかけを行う草原を有する自治体を絞り込むことです。

この作業と並行して当ネットワークが今まで行ってきた事業の更なるステップアップが必要となってきます。例えば、阿蘇の牧野カルテなど未収拾の情報をも取り込みながら草原データベースの客観的基準を作り、今あるデータを市町村が興味を持つように整備することもその一つです。また、自治体間ネットワークと当ネットワークがどのように連帯するかも考えていかねばなりません。そのツールとして草原カードは有効になります。草原カードの有用性を提示して、各自治体からの情報が集まるようになれば、草原 100 選に結び付けることも可能になります。こうした先を見越した協働事業を自治体ネットワークに提案することが必要です。そのためのフォーマットつくりと、これらの情報を HP とどのようにリンクさせるかを含め、技術的な改善も必須となります。その他、地域に残されている文献収集など会員の働きに期待するべきものも沢山あります。夢は果てしなく広がってきますが、ハードな一年になることは間違いありません。そのため、理事を一人増やして対応することになりました。

理事会・総会の様子

こうして 10 月の第 11 回全国草原サミットでの再開を約束し、すべての議題を承認した上で総会を終了いたしました。

全国草原リレー（第 13 回）・団体リレー（第 3 回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第 13 回は、理事でもある笹岡氏に、休暇村と草原について紹介して頂きます。

また、先般から始まった「団体リレー」は、ネットワークの加盟団体などから、その取り組みなどを紹介して頂きます。第 3 回は、西日本草原研究グループの白川氏より取り組みを紹介して頂きます。

休暇村と草原

（笹岡達男：ネットワーク理事）

ネットワーク 10 周年シンポジウムを目一杯楽しんだ翌日、総会の席で草原リレー3 周目のバトンが回ってきたことに気づきました（笑）。

締め切り日を横目で見ながら、「手抜き」と言われるのも覚悟しつつ、今回は少し趣向を変えてみることにしました。

いきなり私事で恐縮ですが、この 6 月末で 9 年間勤めた休暇村協会を退職することになり、種々の資料を振り返ってみる機会がありました。全国 37 ヶ所の現場を回る中で、いつも駆け足ながら結構数多くの草原的景観に触れてきたことに気づかされます。

そこで休暇村のエリア内外に、日本の草原データベース（http://sogen-net.jp/map/）に載っている草原がどのくらいあるのか、またデータベースには載っていないが地域で著名な所はないか、と考え一覧表を作ってみました。休暇村そのものがすぐれた草原環境の中に立地しており、その保全・活用に取り組んでいる例もみられます。しかし多くの場合は、休暇村開設に伴い整備された芝生広場やキャンプ場、スキー場などが草原的景観を見せているのに過ぎないのではないか、とお叱りを受けそうですが、都市公園ほど密な管理がされているわけではなく、「人工

網張温泉スキー場（岩手県）土地造成をほとんど行っていないスキー場で野草類は豊富（休暇村岩手網張温泉）

霧降高原キスゲ平園地（栃木県）スキー場跡地を野草観察の園地として整備（環境省・自然公園財団）

休暇村伊良湖（愛知県）植生回復途上の松くい虫

休暇村茶臼山高原（愛知県）園地の維持管理にヤギが活躍

的」「半自然」「かなり自然」の境界線は必ずしも明確ではありません。そこで本表ではかなり前広に草原っぽいものを拾っています。

こうした一覧表を手がかりに、それぞれの草原の成立経緯、管理形態、利用形態とその変遷等を見ていくとおもしろいのではないかとも思いましたが、あまり大風呂敷を広げるとまたすぐに頭の上に降ってきそうなので、今回はこの辺にしておきます。

吾妻山（広島県）山野草の宝庫として人気
（休暇村吾妻山ロッジ）

秋の蒜山高原（岡山県）休暇村蒜山高原近くの
中国四国酪農大学校第二牧場

らくだ山（熊本県）休暇村南阿蘇隣接の採草放牧地

表　休暇村と草原

No	休暇村名	都道府県	開設 年月日	休暇村 標高(m)	休暇村エリア内草原 (芝生広場等も含む)	近隣の草原 ＊印は日本の草原DB記載
1	支笏湖	北海道	S52.9.19	291		
2	岩手網張温泉	岩手	S40.8.7	770	網張温泉スキー場	
3	陸中宮古	〃	S49.4.10	77		
4	乳頭温泉郷	秋田	S40.12.10	785	休暇村田沢湖高原スキー場跡	空吹湿原（ミズバショウ群落）
5	気仙沼大島	宮城	S53.11.2	30		徳仙丈山（ツツジ群落）
6	羽黒	山形	S50.10.26	312	羽黒スキー場	
7	裏磐梯	福島	S39.4.20	826	休暇村園地、キャンプ場	大内宿のカヤ場＊
8	那須	栃木	S47.7.20	1,217		八幡ツツジ群落
9	日光湯元	〃	H6.7.12	1,483		戦場ヶ原、霧降高原キスゲ平
10	嬬恋鹿沢	群馬	S37.12.21	1,380	野草園（スキー場跡）	湯の丸高原＊
11	奥武蔵	埼玉	H25.7.1	208		

12	館山	千葉	S39.7.10	3		
13	妙高	新潟	S40.7.10	786	休暇村妙高スキー場	妙高高原＊
14	佐渡	〃	H7.4.25	113	休暇村佐渡キャンプ場	ドンデン高原＊
15	乗鞍高原	長野	S38.11.26	1,587	乗鞍高原スキー場	一ノ瀬園地、放牧場
16	南伊豆	静岡	S44.10.1	6		細野高原＊
17	富士	〃	H12.7.10	680	田貫湖ふれあい自然塾	朝霧高原、ふもとっぱら等(＊)
18	伊良湖	愛知	S41.12.12	8	休暇村園地、キャンプ場	
19	茶臼山高原	〃	S55.7.19	1,241	休暇村園地・茶臼山高原	
20	能登千里浜	石川	S49.6.1	17		
21	越前三国	福井	H8.7.10	30		
22	近江八幡	滋賀	S37.7.21	96	休暇村園地	近江八幡西の湖ヨシ原＊
23	南淡路	兵庫	S38.4.16	60		
24	竹野海岸	〃	S54.7.5	67	休暇村園地、キャンプ場	円山川ヨシ原＊
25	紀州加太	和歌山	S38.5.24	100	休暇村園地、キャンプ場	
26	南紀勝浦	〃	S42.4.10	45		
27	奥大山	鳥取	S37.12.15	923	鏡ヶ成高原＊	瓜菜沢牧野＊
28	蒜山高原	岡山	S38.11.15	535	休暇村キャンプ場	蒜山高原＊
29	大久野島	広島	S38.7.15	2		
30	吾妻山ロッジ	〃	S55.7.18	1,002	吾妻山＊（旧放牧地）	
31	帝釈峡	〃	S50.10.9	491	休暇村園地	
32	讃岐五色台	香川	S43.9.21	375		
33	瀬戸内東予	愛媛	S40.12.17	66		
34	志賀島	福岡	S39.7.14	10	休暇村園地	
35	雲仙	長崎	S49.10.23	256	休暇村園地、キャンプ場	雲仙池ノ原ミヤマキリシマ群落
36	南阿蘇	熊本	S51.10.1	645	休暇村園地（野草園）	らくだ山ほか（採草放牧地）（＊）
37	指宿	鹿児島	S40.4.6	2	休暇村園地	

西日本草原研究グループの紹介 （白川勝信：広島県在住／ネットワーク理事）

西日本草原研究グループは、2006 年 5 月に島根県立三瓶自然館サヒメルで発足しました。当初は、草原再生ネットワークの会長高橋佳孝さん、サヒメルの学芸員井上雅仁さん、そして私の 3 人が集まった小さな会でした。第一回の会では、草原が抱えている課題を解決するために、研究者は何を示さなければならないのか、ということが話合われました。そして「草原の価値を客観的に評価すること」と「草原がどのように変化しているかを定量的に示すこと」の 2 つを、研究会の主たるテーマとしました。

またテーマの他にも、この研究会が大事にすることについて話をしました。それは、研究フィールドでの活動を重視しようということです。自然のことを研究するためには、自然の中に出て行きます。原生的自然なら、そこでデータを取って終わりでも良いのかもしれませんが、草原のような人が関わって

北広島町（広島県）での調査の様子

成り立っている自然では、調査結果を公表しておしまい、とするのではなく、草原に関わる様々な人とも関わっていくような研究者が求められていると考えたのです。

それから 10 年の間、研究会は毎月欠かさず開催されてきました。秋吉台の太田陽子さんや藤間充さん、大田の堤道生さん、蒜山の横田潤一郎さんや増井太樹さん、阿蘇の横川昌史さん、芸北の佐久間智子さんらが加わり、それぞれのフィールドで調査しながら情報交換を進めていきました。特に、つくばの平舘俊太郎さんが中心となった全国的なプロジェクトと協同することで、草原の土壌と植物の関係が明らかになりました。現在、研究会のメーリングリストには、全国から 49 人の研究者が参加しています。

私たち研究会の活動は、全国草原再生ネットワークの活動と表裏一体をなすものと考えています。草原の保全を進めるために、科学的見地からの研究と、現場での活動が、歩調を合わせて進む事が必要と思います

秋吉台（山口県）での調査の様子

草原をめぐる動き（2016 年 7 月～10 月）

7/3 草原の復元作業 1（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）

7/9-10 上ノ原の賑わい撮影会＆防火帯刈払い（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

7/23 秋吉台お花畑プロジェクト 1（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）

7/30 草原火消し大会・ミニほうきづくり（場所：熊本県阿蘇市阿蘇草原保全センター・草原学習館、連絡先：阿蘇草原保全センター）

8/6 千町原夏の草刈り（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）

8/6 マルハナバチ調べ隊②（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

8/23 乙女高原を歩こう（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

8/17-18 藤原諏訪神社例大祭と草餅づくり（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

9/3 マルハナバチ調べ隊③（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

9/17 カヤ原を学ぼう！第 3 弾「オギ原の生きもの探検～ごりごりの丘のカヤ原でカヤネズミの巣を見つけよう！～」（場所：京都府立木津川運動公園 城陽五里五里の丘、連絡先：全国カヤネズミ・ネットワーク）

9/18 刈り取り実験②（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

9/25 草原の復元作業 2～セイタカアワダチソウの駆除作業～（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）

10/8 秋吉台お花畑プロジェクト 1（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）

10/15 カヤ原を学ぼう！第 4 弾「オギ原の生きもの探検～ごりごりの丘のカヤ原でカヤネズミの巣を見つけよう！～」（場所：京都府立木津川運動公園 城陽五里五里の丘、連絡先：全国カヤネズミ・ネットワーク）

10/15-17 第 11 回全国草原サミット・シンポジウム（場所：兵庫県美方郡新温泉町、連絡先：新温泉町役場　農林水産課）

10/22-23 茅刈り茅葺きワークショップ（場所：長野県小谷村、連絡先：日本茅葺き文化協会）

10/29-30 私たちと一緒に白川郷で屋根葺きをしませんか？（場所：岐阜県大野郡白川村、連絡先：日本ナショナルトラスト）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

事務局からのお知らせ

地震災害へのお見舞い

（高橋佳孝：ネットワーク会長）

震度 7 を記録した 4 月 14 日の「前震」から続く九州中部地域の大地震（熊本地震）により被災された皆さまに、謹んでお見舞い申し上げます。避難生活など困難な状況に直面されている皆さまの心中をお察しいたします。

全国の草原維持・再生活動を牽引し、まさしく中心的役割を担っていた阿蘇くじゅう地域でも、今回の地震により多くの方が災害に見舞われています。当ネットワークの会員の中にも、また、一昨年に阿蘇市で開催された第 10 回全国草原サミット・シンポジウム in 阿蘇の参加者の中にも、被災され、家屋が倒壊された方々がいらっしゃいます。そして、地元の人たちが千年以上もの長きにわたって守り続けてきた草原の一部も大きく崩壊し、傷つきました。全国草原サミットのときに阿蘇に集った私どもにとって、とても大きな衝撃です。遠方にいて、何もできないもどかしさが募っている会員の方も多いことと思います。

余震はつづくものの、初動対応から生活再建へと復興支援のステージは変わりつつあるようです。これからは細やかに生活を支援する息の長いステージへと移っていきます。一方で、生活インフラの整備、復興需要に駆り立てられて急速に再建する都心部と、災害不況を迎えて復旧・復興が進まない農村部との格差が広がり続けないかと懸念されます。九州の水がめとして都市部の水を育んでくれる阿蘇のことを考えると、より一層心が痛みます。

私たち人間は自然の前では小さな存在です。しかし、小さな存在でも、想いが力になり、心の支えになるのも事実です。現場の状況を正しく認識し、当ネットワークだからできる支援のあり方を見据え、声をかけ合って被災地の再興を応援していきたいと考えています。

被災された皆さまが、この大変な状況を乗り切り、一日も早く心穏やかに過ごせる日を迎えられますよう、心よりお祈り申し上げます。

当ネットワーク会員である公益財団法人阿蘇グリーンストックでは、今回の熊本地震で被害にあわれた牧野に対する義捐金を募集しています。義捐金をいただける方は、下記口座への振り込みをお願いします。

＜郵便振替口座＞01760-3-122538
＜銀行口座＞肥後銀行 内牧支店 普通 1248733
＜口 座 名＞いずれも「公益財団法人阿蘇グリーンストック」
※郵便振り込みには「熊本地震義捐金」と明記してください

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.27　2016 年 7 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　Tel. 0854-82-2727　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】先日の 10 周年記念シンポジウムには、多くのみなさまにお越しいただき、盛会に終えることができました。お礼申し上げます。各地での取り組みを知る機会になるとともに、いろいろな方とお話もでき、とても良い時間をいただきました。10 月には、兵庫県の新温泉町で、第 11 回の全国草原サミット・シンポジウムも開催されます。様々な事例報告なども計画されているようです。草原に関わる多くの人々が集い、情報交換ができる機会になるよう、みなさまのご参加をお待ちしております。